

編集後記

本号は、第1号及び第2号に比べて法科大学院の講義のレビューやエッセイ、法教育の活動報告等を多分に盛り込んだものとなっている。一橋ローレビューを法科大学院生ないし修了生の論文掲載の場とするのみならず、一橋大学法科大学院の環境を修了生や受験生、その他の方々へ伝える場となることを目指したためである。

私自身の思う一橋大学法科大学院の良さは、司法試験に合格するためだけの教育を行い、あるいは学習を積むわけでないことはもちろん、良き法曹となるための研鑽を積むことを第一に掲げつつも、視野を広く持つ学生が非常に多いところである。そのような良さを伝えるためには、本号のように講義や課外活動の様子を紹介することが有用であると考え、本号の構成を採ることとした。このような思いつきに快くご協力いただいた関根規夫先生、吉野太人先生、池永朝昭先生、兪尚樹さん、紅林颯馬さんに心よりの感謝を申し上げる。

もちろん論文についても、私の拙稿を除いては、一橋大学法科大学院の学生の質を示すことのできるものが揃ったと感じている。各論文は、法科大学院の任意科目である「法学研究基礎」にて先生方のご指導を受けながら執筆した論文に加筆修正を加えたものである。そのため、学術面のみならず法科大学院での学習内容の紹介という面においても、これらの論文は意義を有するものと考えている。

また、本号においては、教授の方々に論文を査読いただく前に執筆者間で予備的な査読を行い、その後の校正も執筆者間で行った。編集委員である私の力不足により生じた代替的な措置ではあったが、結果的には論文の質の向上に繋がったと感じている。査読を担当いただいた先生方はもちろん、論文の投稿にとどまらずこれらの作業を引き受けてくださった蟻塚真さん、卜部尊文さん、押田育美さんにも大変感謝している。さらに、共に編集委員として本号の刊行に向けた活動を進めてきた齊藤隆宜さんにも感謝の意を表したい。

そして、本号を刊行することができたのは、編集委員の森村進先生、角田美穂子先生、そして法科大学院長の小粥太郎先生のお力によるものである。編集作業をひたすら遅滞していた私を暖かく見守ってくださり、心からの謝意を示したい。

以上のように、本号の刊行にあたっては多くの方々のご尽力があった。本号が読者の方々の興味関心を惹くものとなっているのであれば、それはこれらのご尽力に起因するものである。

最後に、一橋ローレビューはこれまで半ば不定期の刊行となってしまうていた。本号の刊行が遅滞したのはひとえに私の責任であるが、次号以降定期的に一橋ローレビューが刊行され、一橋大学法科大学院の学習成果と素晴らしい環境とを示す媒体として定着することを切に望んでいる。

2019年3月

一橋大学ローレビュー編集委員 岡田一輝